

令和元年度 国立那須甲子青少年自然の家 教育事業
「なすかしの森 のびのびキッズ（冬編）」報告
令和2年2月15日（土） 日帰り

【目的・趣旨】

幼児が自然の中での様々な遊びにより、好奇心や探求心が刺激されると同時に、体を動かすことの楽しさを知り、徐々に自信をつけていくことで子供の積極性や個々の興味関心を引き出す。なすかしの森の中で、多様な動きの獲得、体力・運動能力の基礎を培う機会を提供する。

また、保護者に対しては、様々な遊びを通じて育まれる幼児の多様な動きや好奇心・探求心への気づきの場を提供するとともに、幼児が自然の中で遊ぶ上での安全を考える学びの場とする。



【連携先】

・郡山女子大学短期大学部 講師 柴田卓氏

【募集対象／実績】

《募集対象》4歳以上の未就学児とその保護者

《実績》8家族22名参加（大人11名、子供11名）

【プログラム概要】

令和2年2月15日（土） 天候：晴

10:00 集合・受付〔玄関ホール〕

10:20 はじめの会〔キビタルーム〕

10:40 冬の森たんけん〔施設周辺〕

森の中を散策しながらネイチャービンゴに取り組んだ。

12:00 昼食〔食堂レストラン〕

13:00 雪あそび、たき火〔営火場B周辺〕

雪を使ったゲームや、そり滑りを行った。

15:15 おわりの会〔キビタルーム〕

15:30 解散

【成果】

- ・屋外での活動に出る前に、冬の自然に関する写真絵本の読み聞かせを取り入れることで、活動に対する期待感、わくわく感を持たせた。
- ・午前のプログラム「冬の森たんけん」の出発前には、体をつかったアイスブレイクを講師の先生主導で行った。参加者の緊張がほぐれ、探検に出る前の準備運動にもなった。
- ・「冬の森たんけん」で用いた「たんけんビンゴ」は、つららや木の実を探すような自然観察をミッションとするものや、木登りや雪だるまづくりをする体を使ったミッションなどを含んだ内容であり、子供たちそれぞれが興味を持ったものから取り組んでいた。どんどん先に進む子供や、じっくりとミッションに取り組む子供などペースは個々で異なったが、スタッフを間隔をあけて配置することで安全を確保しつつもそれぞれのペースで焦らず取り組むことができた。
- ・午後のプログラムでは、通常そり滑りのコースとして設定していない森の中でそり滑りを実施した。普段施設として提供しているそりコースでは雪不足のため使用できないため、施設敷地内であらうじて雪のある森の中での活動となった。子供たちは何度も雪山を上っては滑ってを繰り返し返

し、そり滑りに熱中している様子だった。また、子供たちのそりが暴走しないよう、大人がコース終わり付近やそりが衝突しそうな木の近くで見守り、親同士が協力する姿もあった。

- ・たき火のプログラムでは、2チームに分かれて薪を組んで火をつけた。うちわを使ってたき火に風を送りたがる子供が複数いたがうちわに数は限られていた。子供たち同士で「順番ね」「次貸してね」といったお互いに声を掛け合う姿があり、協力してたき火を楽しむことができていた。
- ・稀に見る暖冬で雪不足の状況ではあったが、雪を探して楽しむことができた。今シーズン雪に全く触れていないという参加者も少なくなく、冬を感じることができ満足しているようだった。

《参加者の声》

「雪があまり降らず雪遊びをする機会があまりなかったので、そり滑りや森の探検など楽しめてとても良かった。」「たき火も子供は初めてだったので、またこのような機会があれば参加したいと思う。」「今の子供が自然と触れ合うことを学ぶことが出来るととても良い事業。続けて欲しい。」等

【課題と方策】

- ・夏編、秋編、冬編と全3回の開催で同様の広報活動を行ったが、冬編のみ申込が伸び悩んだ。夏、秋と比べて外遊びに対するハードルが高いことが要因のひとつではないかと考えられる。内容がイメージしやすい広報手段を使うことや、より多くの人の目に触れるよう広報するなど、野外活動する上で気候が厳しい季節だからこそ、参加者が「参加してみたい」と思えるPRが必要であった。
- ・今年度の活動を広く知ってもらい、より多くの利用者にプログラムとして取り入れてもらうべく、活動事例集の資料を作成する。

国立那須甲子青少年自然の家【作成】事業推進係：岩谷 香



以下、各プログラム内容詳細と期待できる36の動き

【冬の森たんけん】

ネイチャービンゴを用いながら施設周辺を散策した。



【雪あそび】

雪合戦や雪のタワーづくり、そり遊び等の雪と触れ合う遊びをした。



【たき火】

薪を組んで火を燃やした。

